

薩摩琵琶の音楽構造 ——鶴田流を中心に——

曾村 みずき（東京藝術大学大学院）

薩摩琵琶は、明治時代初期の東京進出以降全国的に普及した近代琵琶楽の一つである。明治時代末期に永田錦心が「錦心流」を立てると、それまでの流派は「正派」と呼ばれるようになり、昭和時代初期には水藤錦穰による「錦琵琶」、戦後の鶴田錦史による「鶴田流」の創始と、薩摩琵琶は分派を経て芸能化してきた。本研究は、鶴田流を中心に錦心流・錦琵琶を含む三流派を対象とし、鶴田流の音楽的改革の内実を明らかにすることを目的とする。

これまで語り物音楽の分析には、小さな単位が積み重なって大きな単位を形成する「積層性」に着目した積層分析や、旋律様式の三分類「吟誦（一定の音高をもたない）・朗誦（一定の音高をもちシラビック）・詠唱（歌唱的でメリスマティック）」の分析がしばしば用いられてきた。これらは主に中世・近世の語り物音楽が対象とされ、近代以降では未だ試みられていない。そこで本研究では、薩摩琵琶を近代の語り物音楽として位置づけ、これら二つの方法により構造分析を行った。分析に際しては、各流派の流祖の音源を対象に採譜を行い、各流派の代表曲（錦心流《石童丸》、錦琵琶《曲垣平九郎》、鶴田流《壇の浦》）と、三流派に共通する同名曲（《本能寺》）の二通りの楽曲分析に取り組んだ。

本発表では、代表曲の分析のうち鶴田流《壇の浦》に焦点をあて、錦心流・錦琵琶との比較を通して、音楽構造・語り・琵琶の手（弾法）の三観点から鶴田流の音楽的特徴を提示する。

まず音楽構造の観点では、前語り（物語の導入部分）に通常用いない「吟替り」の曲節が配置されたり、異なる曲節に属する語りの旋律句が挿入されたりと、従来の構成を越えて音楽的な流れが重視された。語りは朗誦を中心とし、ポルタメントによる音高変化や要所での節回しといった声の表現を用いる点から、詞章内容を伝える意識が窺えた。音階構成音外の音を多用する節付けからは、従来の「旋律型を組み合わせる」というよりは「新たに旋律型を作る」という作曲状況がみられた。また錦琵琶から影響を受けた語りと琵琶を同時に奏する技法は、椽打ちの奏法を用いて表現の幅を広げた一方、筑前琵琶から摂取した錦琵琶の歌唱的なナガシの技法は取り入れなかった。琵琶の手では、楽曲冒頭で平家琵琶の奏法を取り入れたり、スリ等の特殊奏法を用いて情景描写を行ったりして、語りの内容により臨場感をもたせるとともに、語りの伴奏とされた琵琶を音楽表現の一要素へと引き上げた。

以上より鶴田流の音楽は、基本的な構造や技法では錦琵琶の影響がみられる一方で、錦琵琶で新たに試みられた他種目の摂取は行わず、異なる音楽性を求めた。鶴田は、伝統的な薩

摩琵琶の勇壮な語りの表現に加え、琵琶の新たな奏法や音色の響きによる豊かな器楽表現を用いて独自の改革を行い、「音楽として聞かせる」工夫を凝らしたことで、薩摩琵琶のもつ古典的な語り、楽器の可能性を広げた。

ドビュッシーのクラリネット用法の独自性と《第一狂詩曲》

——従来の管弦楽法との比較を通して——

竹内 彬（東京音楽大学大学院）

本発表の目的は、フランスにおける従来の管弦楽法との比較を通して、I.ドビュッシーの管弦楽曲におけるクラリネット用法の独自性を明らかにし、II.その視点から《クラリネットとピアノのための第一狂詩曲》（以下《第一狂詩曲》）を考察することである。

《第一狂詩曲》の考察はすでに多くなされている。特にデニス・ニグレンの博士論文（1982）では、この曲の歴史的な背景、モチーフの変容、和声分析や調性、全体の構造、アーティキュレーションやニュアンスなどが、総合的に考察されている。しかし、ドビュッシーの音楽を特徴づける大きな要素である管弦楽法、特にクラリネット用法とこの曲との関連付けは十分になされていない。

第1部では、《第一狂詩曲》以前に書かれた、ドビュッシーの主要な管弦楽曲、《牧神の午後への前奏曲》、《夜想曲》の〈雲〉、《管弦楽のための映像》の〈イベリア〉より〈祭りの日の朝〉における、特徴的なクラリネットの旋律を取り上げられる。そして、それらをドビュッシーの生きた時代および前後の時代の、フランスで流布していた4人の作曲家、すなわちエクトール・ベルリオーズ、シャルル＝マリー・ヴィドール、アンリ・ビュッセル、シャルル・ケクランによる管弦楽法の著作におけるクラリネット用法と比較される。そのことによって、管弦楽曲におけるドビュッシーのクラリネット用法の独自性とは、従来の管弦楽法にとらわれない、むしろ、避けるべき用法をあえて用いることで生まれる独特な音色によって、クラリネットの表現の可能性を広げている点にあることが明かにされる。

第2部では、明らかになったドビュッシーの独自のクラリネット用法の視点から《第一狂詩曲》が考察され、この曲は単なる課題曲としての意味を越えて、ドビュッシーのクラリネット用法を十分に活かし、自身の音楽語法と融合させ、まさに集大成として作曲されていることが結論付けられる。

革命の道具としての西洋楽器

—文化大革命期における模範劇の創作と受容の再検討—

滕 東君（東京大学）

文化大革命が終わった 80 年代の後半より、一度姿が消された模範劇が改めて受け入れられ、大衆文化の一種として、息を吹き返した。それに対し、巴金など文革を経験した知識人と文革期に迫害にあった官僚らは、模範劇が、文化独裁による産物であり、文革が否定された以上、文革が作りだした模範劇も、禁止されるべきと指摘した。一方で、政治から独立させ、一時期の文芸作品として評価し模範劇の芸術性を認める人も多く存在する。昨今文化大革命時の文化生活を回顧するならば、「8 年間 8 億人が八つの模範劇を見ていた」という言い方はすでに通念として固定化されてきた。しかし、当時西洋音楽が中国でどのように受け入れられたかと聞けば、封建主義、資本主義、修正主義を批判する文革期には西洋音楽がなかったと結論を下した人がきわめて多い。彼らはイデオロギーの影響を受け、長らく、固定した観点からの一方的評価しか受けてなかった。その評価を越えて、文革期に音楽文化の実情を探求しようと思っている人は僅かである。これまでの模範劇の研究においては、テキスト分析とプロパガンダ文芸理論を巡って展開された研究が中心を占め、その音楽部分に着目する研究が不足している。模範劇の音楽にかかわる研究では、創作経緯と音楽形式いわば作品分析に拘りすぎていたが、文革以前の京劇音楽と文革以降の現代音楽のそれぞれにつながりながら、すなわち中国の長い音楽史の視野を用い、模範劇の音楽の位置付けを再検討する研究が欠如している。本発表では、西洋楽器を研究対象として限定し、その用いられ方を模範劇の創作と受容の過程を通して分析することにより、文革期における西洋楽器と西洋音楽の受容を再検討したい。

1761年にベンジャミン・フランクリンが発案した、ガラスの腕の縁を擦ることによって音を奏でる楽器「アルモニカ」は、心身への影響をめぐり、音楽史の中で特異な伝説に包まれている。その実態を調査するうちに、それは、17世紀の科学革命期から18世紀に展開していった生命をめぐる経験主義的知見が、世界観、生命観の転換を導き、音楽観の変化をもたらしたと無関係ではないことが明らかとなった。本研究では、フランクリンの手紙やアルモニカへの当時の評価を検討し、神経生理学及び電磁気学の動向と音楽の心身への影響をめぐる議論がアルモニカの盛衰にどのように関連したのかを考察した。

古代ギリシャから18世紀に至るまで、音楽は人間の身体と宇宙の数的調和の中に位置づけられ身体や社会を調整するという音楽観が基盤を占めていた。しかし17世紀の科学革命期から、音の物理現象を考察する音響学と、身体機構を考察する生理学が進歩し、それらが融合しながら、音楽を感知し感情を想起させるメカニズムに関する考察を深めていった。

音は、身体と心の中に介在する神経への物理的な刺激であるという生理学的見解と、弦の振動が空気を伝わり聴覚に到達するという弦楽器モデルからの発想により、音と神経の共感的振動（sympathetic vibration）の概念が音楽の伝達モデルとなっていった。当初、音楽刺激は、ピタゴラス的な調和概念が維持され、感受性の洗練やモラルをもたらすと考えられたが、次第に、音楽の過剰な神経刺激を危険とみなす観念へシフトしていった。

神経に対する音の作用についての見解を進展させたのが、電気生理学の成果である。ガルバーニの「動物電気」の研究により、生命と電気と音は密接な関係に置かれ、音の神経作用は、振動とは異なる、エネルギーの過剰な刺激としての見解に合致していった。雷の実験により音と光が電気の一連の物理的プロセスにあることを確信したフランクリンは、グラスを擦ることで発生する天上的な音色に、静電気に準ずる性質を連想したと思われる。彼がアルモニカで実現させようとしたのは、自然の脅威であり生命現象でもある電気の力を自在に制御し、幸福と利益をもたらすことだったことが、友人ベッカリアとの書簡から推察される。同じ頃、医師であるF.メスメルは「動物磁気理論」を掲げ、アルモニカを医療に用い市民の絶大な人気を集めていた。彼の矛盾の多い理論はフランクリンを含む科学者で構成された調査委員会でも否定され、その医療は風紀を乱すとして集中砲火を浴びた。アルモニカの音に関してまた、「病理の原因」、非道徳を助長させる「性的エネルギー」といった否定的な見方が次第に広まっていった。アルモニカの不名誉な凋落は、メスメルと運命を共にした結果といえよう。その後アルモニカとメスメリズムはロマン派美学の脈絡へ飲み込まれていく。アルモニカの運命は、音楽が生命をめぐる諸科学、生理学や電磁気学とも深い照応関係があることを教えてくれる。